

## 祖父、植田祐弘 の思い出

植田昌吾（祖父の長女満里子の長男） R2.5.23

私が物心ついて初めて祖父に会ったのは、私たち家族がそれまで住んでいた京都から東京へ引っ越したとき、当時大田区下丸子に住んでいた祖父母のもとに一月近くお世話になった時でした。当時私は小学校5年、覚えていることは居間に飾ってあった大きな油絵とドイツ帝国の象徴ともいわれるピッケルハウベ（ドイツの兵士が被る頭頂部にスパイク状の突起のある兜。[編集者注：下に写真あり]）そして大きな掛け時計と外国語の書物と新聞。

その部屋は私が立ち入ることも憚れるような異次元の空間に思えました。

祖母から、祖父は毎晩時を告げる掛け時計に就寝中なのに一つ一つうなづく、という話を聞いたときは、12時には12回うなづくの！と驚き、大きくて怖いと思った祖父に急に親しみを覚えたことが懐かしく思い出されます。

祖父の生家にもきっと掛け時計があり毎晩うなづくいていた子供のころの夢を見ていたのかもしれませんが。

歩いて祖父の住む家に行ける近さに移り住んだ高校生のころから再び祖父との思い出は始まります。祖母が祖父にファーター、と呼ぶのが「ファーザー」と「あなた」の変な和製英語と見たくらい独逸語の知識もない頃でした。私が社会人として建築の道を進み始めた頃、召集される前の祖父が家具職人のマイスターを目指し、腕の立つ親方を求めて諸国を遍歴したころの話をしてくれました。ドイツの美しい木組みの民家建築の話が特に印象に残っています。

私は子供のころから手が器用といわれ工作が得意でしたが、高校生のころから建築家になることを夢見、ぶれずに建築の道に進んだこと、5年間ドイツを中心に欧・南北米・アフリカなどを遍歴したことなど、どれもが祖父から受けた影響の賜物と思っています。

祖父の朝食は私には馴染みの無いコーンフレークとかオートミル、それまで口にすることがないそれらはとうとう馴染めずに終わりましたが、従弟の思い出とも重なりますがクリスマスが近くなると祖父が私達に用意してくれたシュトーレンは私たちをとりこにしました。

また、祖父にとって「ハムはローマイア」と決まっていた、背広に着替え帽子とステッキといういでたちで銀座高島屋に買い求めに行くのが楽しみだったようです。ローマイアも青島から捕虜として日本に抑留された一人と聞いています。

貿易の会社を閉めた際、中南米の得意先へのお礼を兼ね祖母と二人で南米に旅立ちましたが、長旅の疲れで最後に立ち寄る積りであったドイツまでにとどり着けず帰ってきたことをとても残念がっていましたが、その後ドイツには足を踏み入れることなく、青島から抑留されて一度もドイツの地を踏むことなく 92 歳の天寿を全うし亡くなりました。

祖父は、東西ドイツが再統一されることは難しい、と断言していましたが、祖母は 1989 年 10 月のベルリンの壁崩壊を見届け、翌年 10 月、ドイツの統合を報告するため祖父のもとに旅立ちました。

終戦で多くの同胞が故国に帰る中、異国の地に留まり、帰化し、すべてを新しく開拓した祖父と、外国人に対する偏見や中傷に立ち向かい三人の子供を育てた気丈な祖母、互いを信頼する強い絆は、今も強く印象に残っています。

私が北欧に旅立つとき祖父が言った言葉は、「昌吾、旅先で女性を好きになることもあろうが、その地に留まる覚悟がなければ本当に好きになってはいけない。女性を故国から引き離してはいけない」でした。

覚悟が足らず、5年後に単身で帰国することになってしまいました。

#### A. Werner の遺品 ピッケルハウベ (渡邊則子氏長兄、多賀正典氏提供)



